

## 平成12年度特定研究B

### 「シルクロードの遺跡で感じたこと」

研究員

芸術学部教授 掘 研

2000年9月から10月にかけて、重慶市の西南師範大学美術学院に教員派遣の機会を得たのをきっかけに、平成12年度特定研究Bとして、新疆ウイグル自治区の敦煌・トルファンをはじめ、シルクロードの文化遺跡を取材研究することが出来た。

これまで東洋と西洋の芸術文化を比較研究する中で、特に絵画において、その表現形式や技法の違いがあるのと裏腹に、共通点や類似性が随所に見られることに強い関心を持ってきた。特に日本において、近代以降は何事においても欧米優位に物事を考えてきたような気がするが、この度、古代の東西交通路であるシルクロードで展開された東、西、文化融合の足跡を振り返ってみて、中国の芸術文化の層の厚さと質の高さを新ためて認識すると共に、極東にこそその源があったのではないかと思っている。

陝西歴史博物館には周・秦・漢・唐の1000年以上にわたる文化が収蔵されているが、その中でも特に大唐墓壁画は素晴らしい。その収蔵庫は一般公開されていないが、厳重な看守のもとにいくつか観せてもらうことが出来た。保存の為に土壁をそのまま切り取って、裏からパネルで補強して額装をしてある。千数百年もの長い間、密封された地下墓室で眠っていたこれらの唐墓壁画は、発掘されて外気にふれた途端、変色が始まると言う。人が吐く息でさえも悪影響を及ぼす為に、1m50cm以上近づくことは禁止。入館時間も1時間程度に限られた。

1952年から1989年まで発掘が行われ、40箇所以上にわたる陝西出土の唐墓壁画が陝西歴史博物館の地下収蔵庫に保管されているが、図Aはその内の一つ、「唐季賢墓」の「客使」図である。墓室は必ず西方を向いており、右下の傾斜した赭石の帯からも、次第に地下に下って行く墓道の様子が分かる。左の三人は唐官吏であるが、中央の鼻の高い黒い長靴をはいた人物は、ローマからの使者で、その右側には高麗使節が描かれている。漆喰の壁に描かれた線は流麗で写実的である。この絵を見ても西方から、又は東方から中国に使節団が訪れたことが分かり、唐の文化の質の高さがうかがえる。また、日本の高松塚古墳（飛鳥時代）に描かれている女性群像と類似した壁画は唐墓壁画にたくさんあり、中国からの絵師が描いたか、又はそれを模して持ちかえてきたかを疑う余地は

ない。また、敦煌石窟を代表する莫高窟の第172窟南壁「観無量寿経変」（盛唐時代）とイタリアのシエナの市庁舎の壁にあるシモーネ・マルティニーの「マエスタ」（1315～1321）-図Dとを比較して見ると、共通する要素がいくつかあることに気づく。ビザンチン様式からのアイコンのような表情がなくなり、人間的に表現された聖母や天使たちの頭の後ろには、神のしるしである光輪が描かれているが、図Bのように仏教美術の場合もその発想が全く同じである。また、法隆寺金堂壁画の第10号壁「薬師浄土」図の天蓋の図柄と「マエスタ」にも描かれている天蓋に似た図柄が似ているように見えて、以前から気になっていた。もちろん天蓋とは言えないかもしれないが、図Cは唐季仙蕙墓に描かれた「宮女」図であるが、その服装や人物のポーズなどが、図Dの「マエスタ」にある天使たちにも似ているように思える。

また、図Bの他に、第148窟や榆林窟の第25窟「観無量寿経変」を見ると、幾棟も立ち並んだ極楽浄土の御殿が描かれているが、その建造物の奥行きを表現するために、透視図法が、すでに考え出されていたことが分かる。また、敦煌壁画の中には支配者や寄進者が変わるたびにその壁画を石灰で塗りつぶし、更に新たな絵が描かれたり、寄進者の名前が書き加えられたものも多いが、榆林窟の土質は砂に基石のような砂利混じりの地層だけに、漆喰や石灰などで上塗りをしてまず下地を作り、それが完全に乾燥しないうちに線描を施しながら同時に鉱物顔料で着色、いわゆるイタリアでのフレスコ画と同じ技法のものである。しかし敦煌は砂漠の乾燥地帯だけに、土中から塩分が吹き出して来たり、鉱物顔料に含まれる成分が化学変化を起こして、多くの壁画が、不運にも変色してしまったものが多い、古いものはヘレニズム文化の影響も感じられるが、西方から東方へ、また東方から西方へ文化交流が行われながら、融合していった足跡が見られて面白い。

秦の始皇帝の陵墓の東1.5kmにある兵馬俑坑は、1974年に地元の農民が井戸掘りの作業中、偶然の陶俑の破片を見つけたことから、考古学者による発掘が始まった。深さ4.5～6.5mの中に、整然と並べられた陶俑や陶馬や戦車の数は8000体にもものぼる。始皇帝の死語も永遠に守り続けるために再現された大軍団は、人々の心を震撼さ



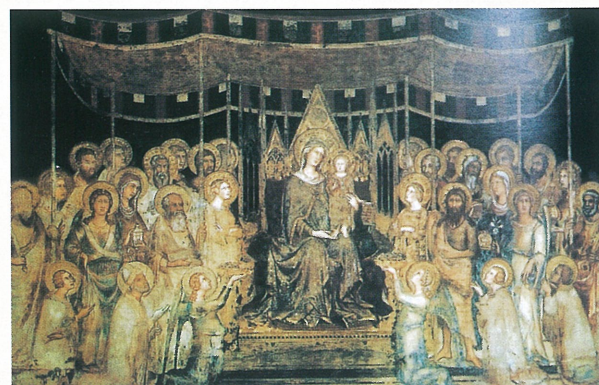
図A 唐李賢墓「客使」



図B 莫高窟 第172窟「觀無量壽經變」



図C 李仙蕙墓「宮女」



図D シモーネ・マルティニー「マエスタ」(1315-1321)

せた。しかも陶俑の衣服や頭部などには、生漆を塗り、その上に彩色が施されたあとが残っている。その色はたいへん鮮やかである。日本の正倉院宝物の多くにも、「密陀絵」と呼ばれる、油絵と同様に漆と油で混ぜた顔料で描いた漆絵が見られるように、中国には漆技法が古くからあり、ヨーロッパの油絵技法の発展に与えた影響は大きいとされている。なお、陶俑や陶馬の形体はダイナミックで真に迫り、当時の人々の創作エネルギーとリアリズム表現には驚かされる。

重慶市内より160kmのところにある「大足石刻」には、西南師範大学美術学院の先生方に車で案内していただいた。北山磨崖像、第136号窟の「普賢菩薩像」を始め、仏教經典に基づく物語や、歴史上の人物像など、晩唐(892年)から南宋の末期にかけて彫られた5万余体が残されている。地理的条件からも、都から離れた奥地にあり、他の石窟に比べると、荒らされることも少なく保存状態も良い。

洛陽の市内から13kmの伊水のほとりにある中国三大石窟の一つ「龍門」には、1kmにわたり1234窟、仏像10万体が現存する。しかも仏教美術でありながらも、宗教的枠を突破し、現実生活を源泉として形が異なり大小さまざまな生き活きとした各種の芸術像を作り出した。しかし古くから、9の王朝が都を置いた洛陽だけに、支配者が変わるたびにこれらの仏像の顔は削り落とされたり、外国からの盗難や文化革命での破壊などの被害を受けて、完全なものはほとんど無い。風化しながら、今ではその外形をほとんどとどめない、石に戻って行く顔の無い仏像達をスケッチしながら、その宿命の歴史を考えると、一層熱いものを感じた。また、それぞれの街にはそれぞれの人々の生活の営みがあり、手当たり次第にスケッチをした。生きた文化や精神に、自分の目で直に触れることが出来たことは、私にとっては大きな収穫であった。ウルムチから200km離れたトルファンまでは、乗用車でゴビ砂漠の高速道路を走る。朝日に反射する地平線に、まるで青い海でもあるかのような蜃気楼が見える。この道はダムで河をせき止め、その河の上を舗装して出来たものであるらしい。トルファンには6~7世紀に繁栄した高昌国時代の古墳群や、その城跡などの遺跡が多く残っている。地理的には天山山脈のふもとにあるオアシスの街で、天山山脈からの雪解け水で潤ってきた。しかし降雨量が少なく、地表から蒸発する水分の多い為に地中の塩分が上がってきて、湖の周辺はまるで雪のように白く塩がふいている。しかし街路樹としてポプラやニレの木が繁っているのは遠くから土を運んできて、ゴビの表面に盛り土にしてから、人工的に植樹をしたものだそうだ。また昔からの生活の知恵で、地下水脈まで縦穴の井戸をいくつも掘り、その井戸と井戸との地下水脈を

トンネルでつなぐ、カレーズと呼ばれる地下水道がある。その総延長は3000kmにも及ぶと言われている。カレーズの周辺にはブドウ畑が広がり、バザールには色々な種類の干しブドウが並べられ、観光客を楽しませている。この人々の交通機関はロバ車であり、土の家に住み、顔立ちも服装も、中央アジアの人々によく似ている。言語はウイグル語を使い、大部分がイスラム教徒である。西遊記の舞台として有名な火焰山のふもとを走りながら、ベゼクリク千仏洞に向かう。赤い岩山の表面は、どんどん風化しており、剥き出しになった粘土質の地層が、なんとなく仏像群のようにも見えて、雄大である。6世紀、漢民族の麴氏が建てた交河古城や高昌国の風化した城跡には洞窟や土レンガの壁などの一部が、かろうじて残っており、当時は繁栄したであろう街の様子を今に伝えている。

アスターナ古墳は、当時の高昌国の貴族たちの古墳群であり、その墳墓の数は100に及ぶ。今では、その一部が観光客のために公開され、墓の内部をそのまま見ることができる。狭い墓道を下って行くと、壁画が現われた。土壁に漆喰を塗り、その土に彩色画が描かれているが、末世にもつながる仏教思想のもとに、經典に基づいた教訓的物語である。一番奥まった地下墓室には壁画に囲まれた祭壇があり、ミイラ化した遺体が安置されていた。ゴビ砂漠の乾燥した大地であるだけに頭髪や爪や皮膚までが完全に残っている。

トルファン博物館では学芸員にお願いして、ミイラ室でスケッチをさせてもらうことが出来た。ガイドさんたちはバザールに行ってしまう、たった一人でミイラをスケッチするのは良い気持ちはしなかった。しばらくすると、素朴な女子職員が熱い白湯を大きなコップいっぱいに入れて、親切に差し入れてくれた。

その夜はホテルの道路向かいにある小さな家で結婚式が始まり、派手に着飾った招待客が、にぎやかな音楽の中で夜遅くまではしゃいでいた。クロッキー帖を片手に、美しい民族舞踊によるショーを楽しみながら、中央アジアやグルジアで見たものによく似ていると思った。昼間の地表温度が60度にもなるだけに、陽が落ちて、夕方から夜の生活を楽しむようだ。観光用のロバ車に揺られながら、私も散歩に出かけたが、街の広場には、屋台が所狭しと立ち並び、シシカバブーや麺類などを食べながら、ワインや地酒を楽しむトルファンの地元の人々の熱気でムンムンしていた。原地で取材したスケッチとその後制作した油絵作品を、芸術資料館展示室において、2002年10月31日より11月6日まで、日本画教授の倉島重友先生と二人で特定研究報告展として発表した。



図E 榆林窟スケッチ

#### 取材した遺跡および博物館

##### 西安

陝西歴史博物館、西安碑林博物館、漢陽陵、兵馬俑坑、茂陵半坡遺物博物館

##### トルファン

高昌古城跡、交河古城跡、アスターナ古墳群、ベゼクリク千仏洞  
新疆ウイグル自治区博物館

##### 敦煌

莫高窟、榆林窟、鳴沙山

##### 鄭州

河南省博物館、黄河遊覧区

##### 洛陽

洛陽博物館、龍門石窟

##### 重慶

大足石刻、西南師範大学美術学院

#### 資料

唐墓壁画や敦煌壁画の写真は、それぞれの図録から使用した。

また、この取材旅行で、西南師範大学の先生方はもとより、各地での現地ガイドの方々や、西日本中国旅行社にはたいへん御世話になり、感謝致します。